

# 茶熊ホワイトデイズ

RASN

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2016年のホワイトデーに書かれたもので前作のバレンタインデイズの続きみたくな感じですよ。

生徒会ばかりとだからたまには風紀委員をと思ったりした感じに書こうとしましたがどうしてもそつちに焦点が…、そしてクラソフィは無理だなんて思ったりした作品だったり。

# 目次

茶熊ホワイトデイズ

1



# 茶熊ホワイトデイズ

—茶熊学園 校庭—

「これが伝説級の滑り方だ！」

「そんなら俺はギターをかき鳴らしながら滑るぜ！」

「こら！お前らもう少し回りに迷惑をかけない滑り方をしろ！」

そしてそんな氷上を眼鏡をかけて腕には風紀と刺繍された腕章にホイッスルを片手に回りに注意を喚起している三年生のクライヴがいた。

「そこっ！そんなところで釣り針を垂らしても寒ブリは釣れない！あと食いながら滑るな！」

「おーおー張り切ってるねえ？クライヴ委員長？」

目をつり上げるクライヴの肩を叩くのは同学年のデューイがいた。

「ん？デューイか、お前も風紀委員なら手伝ってくれ！」

「いやさ…別にそこまで眉を吊り上げなくてもいいんじゃないかな？楽しくやろうぜ？」

「それに関しては俺も賛成だな。」



クライヴは辺りをキョロキョロと見渡すがソフィの姿は勿論無くて、眼に映るのはニヤニヤとにやつくオズマとカメラを持つデューイであった。

「いやー…いいもん見せて貰いましたよー? ご馳走さん。」

「あーそうだ面白そうだから撮っておいたぜ? ソフィちゃんの前で可愛らしい姿のクライヴを…」

「やつ…やめろっ!」

するとクライヴはデューイに突撃するが、デューイはヒラリとかわしてクライヴは水面に顔を滑らせた。

「そういうわけにはいかななくこの写真は裏メンズナイツ増刊号のお便りコーナーに応募すんだからさー」

「せめて視線はつけとけよプライバシーの為だぜ?」

「…珍しいなオズマがプライバシーの話を持ち出すとは…」

「どういう事だよ?!」

三人が楽しく談笑しているとクライヴはムクリと立ち上がっていた。

「おっ? 立ち上がったか、平気…か?」

デューイがクライヴを見るとそこにはクライヴがいたがその回りには怒りとも見える冷気が立ち込めていて、その顔は鬼のような形相をしていた。

「おやおやー？何だかスリルの予感がするねえー？」

そして三人の横に牙がついた兎のような人形のデビットに股がって滑っている右目を眼帯で塞いでいる少女のロザリーが顔を出した。

「…ここは危ないからあっちいけ…」

「ええー…面白そうなのにー…！」

「いやそういうのいいですからー！あっちで滑りましようよー？」

下に敷かれているデビットが喋るとシヤカシヤカと這って風紀委員達から離れていった。

「それで…目の前のはどうする？」

ロザリーを立ち退かせたバイパーはクライヴを指差した、指差す方にはクライヴがいるがその顔には魔物のような仮面を被っており三人に迫っていた。

「どうって…迎撃だな、ああなると止めないと回りに被害を広めちゃうからな…」

「そうだな、まあやりますか！」

「…面倒だな…」

「グオオオ！」

そして氷上において激闘が始まった。

一方なその頃…

風紀委員達から離れていったソフィは生徒会のメンバーが集まっているところへと滑って来たのであった。

「皆様お待ちせいたしました！」

「あら？随分遅れてきたわね？」

「申し訳ありませんカスミ様少し立て込んでしましまして…」

「ノン問題でござるよソフィ殿、それに皆待つのは得意でござるよ。」

「そうですか！それにしてもフラン様はお上手に滑りますね？」

「そうでござるうか？」

そう言うフランは氷の上をすいすいと滑っていて、ついでに跳んだりクルクルと回ったりとしていた。

「流石はくの一つて言った事かしらね？」

「ところでカスミ殿は滑らないでござるか？」

「私は良いわよ滑れないし…それにこの子の世話しないとね。」

そう言つてベンチに座るカスミは膝上のヒナを撫でていた。

「…ピヨ…撫で撫で嬉しい…」

「あらあら…カスミはすっかりお母さんですね？」

「…もう突つ込むのにも飽きるわ…」

そしてカスミの隣のフローリアが茶化すがもはやカスミはあまり気にせずヒナを撫でていた。

「そう言えばお父さんのRASNNさんは？」

「…、…あそこよ…また転んでるし…」

カスミは一つ溜め息をつくと転びながらも滑ろうとしているRASNN（赤髪のぼんとかパプリカとな呼ばれる主人公）がいた。

「…!？」

「大丈夫?にーに?」

そしてそこには割りと滑れているコヨミやリーゼロッテもいた。

「…シシヨ頑張つてるでござるが…中々上手くは…。」

「はい、まずは転んでから学ぶのがスケートですから。」

「うっしっし…転びすぎて氷とか割れないかなあ…?」

すると生徒会のメンバーらの片隅でするとロザリーが滑って来た。

「そんな変な事言わないで下さいよ?!ほんつと!そういうのいいですからっ?!」

下に敷かれているデビットも滑りながら叫び、その頭は湖の端に着いていた。

「あれー?何で端から端まで滑ったのにスリルな事が起きないのー?」

「起こない方がいいですよ!ほら早いところ上がりましょうよー?」

「…キヒ…よついいしよつと…あー霜とか付いてるわー払わないとー?」

ロザリーはピョンと跳ねて氷の上に足を着けてデビットを回収し、腹とかに付いている氷とかを払い始めた。

「よつし!今っ!」

「のわっ?!」

すると回収した瞬間にデビットの腹に付いているファスナーを思いつきり落とした。

「なっ…何て事をー?!」

「うっしっしーさてさてどうかかなどうか…?」

そしてロザリーはキョロキョロと辺りを見渡し始めた、だがその周囲は至って平和に滑っていた。

「あれれ?何で?」

「あわわ…早いとこ閉めないと…」

ロザリーは怪訝そうな顔で回りを見渡し、デビットは腹のファスナーを閉じようとするが取手は下の方であり中々閉じれなかった。

「むううう…！何で何も起きないのー？

！」

「珍しいこともあるもんですねー？…もう少しで…！」

デビットが何とかファスナーをもう少しで閉じれそうになっていた、だがその時一人一個の後ろから轟音が連続で鳴り響いてこつちに来ていた。

「うわあああ?!止まんないよおー?!」

そこにはハンマーでグルグルと回りながら氷の湖へと向かう、黒猫学園からの留学生のユツカであり。そのハンマーの頭からジェット噴流が吹き出して勢いを生んでいた。

「おお?!これはスリルがやって来たー?!」

「うわあ…かなりヤバイの来ちゃったよ…?!」

ロザリーは喜び、デビットは落胆していた。そしてそのユツカは高くピピョーンと飛んだ。

「うわあああ?!どいてどいてー?!」

「にーに?!何か大変だよ?!」

「このままでは我輩がずぶ濡れ…いや氷づけになる!」

「…?!」

まず気づいたのはRASNとリーゼロット達であった。

「…!」

「…はい…クマロン…」

「ん?どうしたのだリーゼロットテ?」

するとRASNはリーゼロットテに何か命令をするとリーゼロットテは腰につけたクマロンを取り出した。

「…目標に…狙いを……定めて…!」

「…もっ…もしやリーゼロットテ?!」

「…撃つべしっ!」

「やっばりー?!」

そして勢い良くクマロンを上打ち上げて落下中のユツカ目掛けて飛ばした、クマロンは上手くユツカの持ち手に当るとハンマーはポロリと落ちて地面に激突した。

「痛いっ?!って…わわわっ!」

だがユツカは依然として落下中でこのままだと只では済まないと思える、まあ飛行船

から落ちて飛行島に着地出来るなら平気そうでもあるが。

「…!!」

「うわつと?!」

ユツカは落ちたが何とかRASNNが受け止めていた、RASNNはとても苦しそうな顔をしてその下の氷面も無事であった。

「痛たた…あれ?RASNN君?」

「……」

「…ごめんね…また私ドジしちゃって…あと…」

「?」

ユツカは沈んだ顔をしていたがその顔は赤い顔をしていた。

「何と言うか…恥ずかしいというか…このままがいいというか…何と言うか…」

「…??」

RASNNはユツカをお姫様抱っこしながら首を傾げ、ユツカは頬に手を当てて赤くなっていた。

「あらあら、何とも微笑ましいですね…ね?カスミ?」

「…そうね…微笑ましいわね…」

「ピヨ…?何でママ怒ってるの?」

「おっ…怒ってないわよ?!」

ベンチで和やかな雰囲気醸し出すなか、その近くにいるロザリーは不機嫌な顔をしていた。

「ちえー…もう少しなのにさー…」

「はあ…何も起こらなくて良かった…」

「ぎぎっぎーぎーん!ぎぎぎっぎーんぎっぎっぎーん!」

すると何やら太鼓の音と共に湖の中央からどこぞやの対宇宙怪獣決戦兵器のテーマを口ずさみディーネが腕組みをしながらバリンと氷を突き破って飛び出してきた。

「あらあら皆様私の湖に何か?」

そして中央が思いつきり割れたことでそこから中心に氷面がパキパキと亀裂が走り始まる、よって湖面の氷は崩れ始め先程まで滑っていた者達は陸地へと駆け始めた。

「これよこれー!スリルキター!」

「ああっ?!皆様申し訳あります…ゴボボボ…!」

波立つ氷水の上にデビットを足場にしてロザリーは喜び。

「……大…丈夫…?」

「うん!平気だよリーゼねーね!」

「あの一…我輩の心配は…?」

リーゼロッテとコヨミはクマロンを何とかして使って陸地に着いていた。

「どうなつてやがのわっ?!」

「オズマ頭を借りるぞ…!」

「何しやが…!ゴバババ…?!」

バイパーはオズマを足蹴に陸地に足を着けて、オズマとデューイは氷の浮かぶ湖に沈み。

「…グオー!」

「えっ?!」

そしてクライヴ未だに仮面を外さずにソフィを抱え上げて崩れる氷を飛び移っており、RASNもユツカを抱えてクライヴと同様の事をしていた。

「アंकクライアブル!流石はシシヨーでござる!」

「そうじゃないでしょ?!早く何とかしないと…!」

そして陸地にいるフランはRASNの動きに感嘆し、カスミはそれに突っ込んでいた。

クライヴとRASNらは同じ氷へと集まった、だがそこは陸地とはかなり離れた場所であった。

「グウ……！」

「遠いですね…飛び移るにももう氷が…」

既に四人の近くには飛び乗れそうな氷は無いのであった。

「どっ…どうしよう…私達もあんな風に…」

ユツカの指差す方には湖に浮かんだオズマ達でありもはやタップしても致しようもない氷づけとなっていた。

「…。」

そして彼らの乗る氷もどんどん崩れて面積がどんどん縮まっていた。

「…グア……！」

「…、…!!」

するとクライヴはRASNNに何かを提案し、RASNNはそれに対して頷いた。

「わわっ?! もう氷が?!」

「このままでは……！」

最早面積は四人が何とか立てる狭さになってしまっていた、だがその時RASNNはユツカをクライヴはソフィを抱えた。

「クライヴ様…!?何を?!」

「RASNN君! もう回りには乗れるものなんか……！」

「…っ!!」

「グオオ!!」

そして二人は声を唸らせ抱えた二人をめいっばいに力を込めて投げた、その方向は陸地で生徒会らのメンバーが集まっているところであった。

「ムムツ…! シシヨールから何やらシンパを受け取ったでござる!」

フランは何かを感じ取るとバツと跳び落ちてくる二人を受け止めると静かに着地した。

「うう…もう暫くは飛びたくはないよお…」

「…ハツ…! クライヴ様とRAS様は…?!」

ソフィが立ち上がり先程までいた氷の方を見たがそこにある筈の氷は存在せずに、氷づけへと変貌していた二人が浮かんでいた。

「にーに?!」

「パパっ?!」

「フローリア! 早く先生とか呼んできて!!」

「はいっ!」

「そんな…私たちを助かる為に…!」

「早く助けないと…!」

「駄目でござる！それでは二ノマイでござる！」

飛び込もうとするユツカをフランが羽交い締めにして止めていた、だがユツカはそれに負けずとジリジリと歩を進めていた。

「だって……！私がドジしちゃってこんなことになっちゃって……！」

「いや……これはデイーネ先生のせいだと思うけど……」

そしてそのデイーネも仲良く湖に氷づけとなつて浮かんでいた。

「どうすれば……」

「あら？皆様どうなされましたか？」

すると野次馬の中からひょっこりと顔を出したのは、制服ではなくメイド服を着用するチエルシーであった。

「チエルシー殿実はかくかくしかじかと言う感じでござって……！」

「ふむふむ……まるまるうしうし……ってご主人様が大変なことにも!？」

尚チエルシーもコヨミやヒナやフラン同様、R A S NをR A S Nと呼ばないのである。

「たつ……大変ですう！早く救助を！」

するとチエルシーは丸い円盤状の機械を取り出した。

「あれ……？それってモノクロームちゃんの……？」

「いえーこれはルーちゃんに有らずー！カティア先生が作ってくださったルーちゃんmarkⅡコリンズ仕様でございますー！」

良く見るとアイドルの一人でもあるモノクロームと共にいるルンバ的なルーちゃんとは違い、ホワイトブリムがつけられており機体も黒く塗られているのである。

「待つてチエルシー……大丈夫よね?！」

「大丈夫ですよカスミさん！この吸引力を使えば……！」

心配するカスミを他所にそう言つてチエルシーはルーちゃんmarkⅡを突き出してスイッチを入れた、するとルーちゃんmarkⅡが吸引を始めて湖面に浮かぶ人入り氷をこちらへと引き寄せていた。

「いいわその調子……！」

「すごいねー！チエルねーねー！」

「もお……そんなに誉めないで下さいよーコヨミちゃん……！」

チエルシーはコヨミに誉められ照れていた、そしてそれと同時にルーちゃんmarkⅡの吸引力が勢いを増していた。

「ちよつ……?!チエルシー?!」

「ふえ……?……つて……ああ!?!通常モードから削岩モードになってますですー?!」

チエルシーが手元のスイッチを見てハツとし、一方湖の方の氷達はズイズイとルー

ちゃんmarkⅡに引き寄せられていた。

「チエルシー！ストツプよ！ストツプっ！」

「はわわ……えつとこれが……ああ……?!勢いが更に?!」

どうにかしようとして慌てているとルーちゃんmarkⅡの引き寄せが強くなりディーネが入った氷がずももとルーちゃんmarkⅡに取り込まれて砕き始めた。

「ディーネ先生ー!?…は水そのものだし別に大丈夫だけど…それより何とかしなさい?!」

「えつと……えつと……ままよー！」

チエルシーはルーちゃんmarkⅡに対してゴスツと手刀を食らわせた。

すると吸引は止まったのであった。

「ふう……危機一髪ですね……！」

「ちよつとまだよ!?!」

カスミの声で前を見るとそこにはどんどんと遠ざかっていた。

「あれ……?何ででしょう?」

「何でって……そのルーちゃんが逆回転してるのよー！」

カスミの言うとおりルーちゃんmarkⅡは逆回転して旋風を起こしていたのであった、そしてその回転は強くなり旋風は渦を生んで湖面の氷を巻き上げた。

「わわっ!?! 大変ですう!?!」

そして巻き上げられた氷達は茶熊学園の各所に落ちたのであった。

その後生徒会や風紀委員の尽力によって湖から落ちてきた氷は回収され、中の人も無事に救出されていた。なお削られたディーネは平気そうな顔で学校に戻っていたとか。

—茶熊学園 第一保健室—

「いつつ…あれ俺達凍っちゃって…」

「あ…起きたか…? もう放課後になっちゃったぜ?」

茶熊学園の第一保健室で目を覚ましたのはオズマとデューイであり、隣にはザックやリアムやクライヴが寝ていた。

「…つたくよ…ただ暴走した委員長さんを止めようとしたのにこんなことになっちまうなんてよー…」

「ああ…そうだ、デューイ…アレは？」

「ん？…ああ…アレか…早いところ現像しないと…」

「そうじゃなくてよ、平気なのかそのカメラはよお？」

「安心しろって、こいつは防水・防災・防雷もできる優れモンだ。そう易々は壊れねえって…」

「へー…そうかい、んじや写映室の現像機借りに行こうぜー？」

「ああ…体痛えけどよ…」

オズマとデューイは苦しそうに体を起こすと保健室から出ていった。

—茶熊学園 第二保健室—

一方第二保健室にはRASNNが寝ていた。

暫くしてRASNNは目を覚ましたのであった、だがその頭には枕では無いような感触を覚えていた。そしてその感覚を確認しようと首を横に向けるとそこには体があったのであった。

「あら？起きたのRASNN？」

そして向いている方向から声がした、そして見上げるとそこには三年生なエスメラルダがにっこりと笑ってこちらを見ていた。

「…!？」

「…：うん、熱は無いみたいね。良かった良かった♪」

そう言ってエスメラルダは膝上のRASNの頭を撫で始め、RASNは戸惑いながらもそれを享受していた。

「大丈夫？体に痛いところとかない？」

「…。」

「そう、何かあったらお姉ちゃん心配しちゃうから…」

尚エスメラルダはRASNの事はあの四人とは違い、RASNの事はちゃんとRASNと呼ぶのであった。だがRASNの事を弟の様に可愛がっている為、たまに弟君と呼んだりもするが。

「…：そうだ！弟君、ちよつと頭を横にしてね…？」

「…：？」

エスメラルダは頭を撫でるのをやめるとRASNにそうお願いし、RASNは残念そうにも言うとおりに膝の上で横となった。少ししてRASNの耳に何かが入ってくるような感覚を覚えた。

「大丈夫？痛かったら言ってね？」

「……！！」

エスメラルダはRASNに耳搔きをしていたのであった。

「そう、ちよつと吹くわね？ふー…」

「……。」

そしてRASNの両耳を掃除し終わるとまた頭を撫で始めた。

「平気だった？」

「……」

「ふふっ…またして欲しいの？分かったわお姉ちゃんに任せなさい！」

暫く膝枕が続いてRASNは寝てしまっていた。

「あらあら…、…あら？」

すると保健室の扉が開きそこにはカスミとメアらがいた。

「すみませんー？会長はここに…」

先頭に立つて扉を開けたのはカスミであり、開けた瞬間の情景を目に写しそこデコにはシワがよっていた。

「えっと…何をなされておるんですか…？エスメラルダさん？」

「何って…膝枕だけど？」

「そんな平然と……！」

「まあまあ……カスミ殿……今はシシヨーもシエスタしてるでござるから、叫ぶのはいかんではないですよ。」

「……ぐうう……！」

「それよりも……RASN君は膝枕よりちゃんとベッドで寝かした方が……」

「それもそうね……名残惜しいけどメアちゃんお願いね？」

「……分かつてます……よつと……！」

そうしてメアはRASNをヒョイと抱えるとベッドに寝かせようとしていた。

「……でももう放課後だし、部屋に送ってあげたら？まあ私はここに置いても構わないけど……」

「メア！早く部屋に送り届けるわよ！」

「えっ……うん……？」

カスミはメアにそう命令しメアはそれに驚いていた。

「それでは、失礼致します！」

「あつ……えつと、それじゃ……」

カスミは逃げるように保健室を出てメアは戸惑いつつもそれを追っていった。

「むう……カティア先生に貰った風邪になっちゃう薬で弟君に看病プレイしたかったな……」

…

そう言つてエスメラルダ机上でコロコロと薬入りの瓶を転がしてふてくされていた。

―茶熊学園 第一保健室―

既に第一保健室で寝ていたのはクライヴだけとなつていた。

「うつ…うつ…ここは…？保健室か？」

クライヴは目を覚まして辺りを見渡し机の上にある眼鏡をかけて頭を抱えた。

「…何で保健室に…スケートしてるときに転んでその後が思い出せん…」

頭を抱えながらクライヴは立ち上がり身だしなみを整えて壁に掛けられている時計を見た。

「…時間的にもう放課後か、一応校内の見回りをしてから寮に帰るとしよう。」

そう呟き保健室の扉に手をかけようとするすると手をつける前に扉はガラリと開いて、目

の前にはソファイがいたのであった。

「ソ…ソファイ殿?!」

「クライヴ様…大丈夫でしたか?!」

「じつ…自分は平気です! 風紀委員たるもの体が資本だからな。」

「そうですか…あの時はもう駄目かと…」

「…すまないが…あの時とやらの事を説明してもらいたいんだ、その時よの記憶が…」

「分かりました、では…」

そしてソファイはクライヴにディーネが現れてから今に至る状況を説明した。

「…はい、あれこれくどくどといった感じでした…」

「…成る程…どれそれとろとろと言うことか…」

二人は保健室に備え付けられているソファに向かい合うように座っていた、そしてクライヴか頭を抱えていた。

「そうだったのか…後で検討の必要があるか…」

「ふふつ…クライヴ様とても真面目ですね。」

「そんな…今日だってホワイトデーで浮かれる者を取り締まりきれなか…ああつ?!」

急にクライヴは叫び先程まで寝ていたベッドに向かい掛けてある自分の上着をまさ

ぐった、そこには水に濡れてひしやげた紙袋を見つけうずくまった。

「ああ……しまった……！ すっかりと濡れてしまった……！」

「どうされましたか……？ それは……？」

ソフィはクライヴを追って探していた物を目にしたのであった。

「そつ……その……バレンタインデーのお返しといった感じだが……こんなんじや……」

「いいえ……お気持ちだけでもとても嬉しいです……！」

ソフィは腰を落としてそう言つて紙袋を引つ込めようとするクライヴを腕を優しく掴んだ。

「ソフィ殿……」

「……えへへ……何か恥ずかしいですね……」

暫くしてソフィは少し顔を赤らめて立ち上がった。

「……それじゃこれを……粗末なものだが……」

「いいえ……ありがとうございます……！」

クライヴはその紙袋をソフィへと渡したのであった。

「あら……？ 申し訳ありません……私今日の夕食の担当でした！ そろそろ時間で寮の方に戻らないと……！ それでは……！」

「あつ……」

そしてソフィは保健室から去りまたクライヴだけが残った、だが残されたクライヴの顔は笑っていた。

「…さて！見回りに行くか！」

そしてクライヴは意気揚々と校内の見回りを行えた。